ラスクにおける認識の理念

竹村喜一郎

はじめに

ラスク（Emil Lask, 1875-1915）は第一次世界大戦に際会し、志願兵として従軍、早世したため抱懐していた体系構想を現実化できず、また結果として後世に顕著な影響を与えることもなかったと言われる。実際彼は学史的にはヴィンデルバントによって礎を置かれ、リッケルトによって確立された新カント派＝西南ドイツ学派の系譜に連なる者としてその名のみ挙げられるのが通例である。だが生前彼の盛名の機縁となった『哲学の論理学と範疇論』（Die Logik der Philosophie und die Kategorienlehre, 1911――以下『哲学の論理学』と略記す）および『判断論』（Die Lehre von Urteil, 1912）は、カントの先験的論理学を単に感性界の認識に蹟躓し、認識そのものについての反省を欠くものとして、これを超出すべく認識論の論理学、ロゴス論理学 Logologie（II 127）の樹立を企図したものであった。こうした雄図は「階層理論」さらには「超文法的主語－述語理論」として結実している。とはいえ、同時にラスクの哲学は、前記二著の枠内においてもカントの独断論批判の意義の看過ともいえる客観主義への回帰、あるいは非合理主義の徹底という様相をも呈していることがしばしば指摘される。したがってマーテァの「エミール・ラスクの哲学は、それが観念論のアポリアを明確に意識化することによって、先験的観念論の自己反省の不十分さを間接的な仕方で証示している点において、現実的で永続的な意義を有している」[1]という評価は首肯しうるものかも知れない。しかしこうした評価の視角によっては、ラスクが新カント派の問題設定の不十分さを克服するためにとった自覚的方向性およびその積極的意義は明示されないままに留まるであろう。それ故新カント派の問題性を再確認するためにも本論はラスクの認識論に焦点を合わせ、彼の哲学を検討することを課題と

する。認識論に焦点を合わせるのは、ラスク自身が「哲学にとって本質的であるのは、ただその認識性格だけである」（Ⅱ199）と述べていることから窺われるように、彼の哲学の中心が認識論にあるからである。ここに課題を達成する際のポイントを予め記すなら、それはラスクの〈妥当 Gelten〉概念の検討に置かれる。〈妥当〉概念こそラスクが西南学派の先行者ヴィンデルバントおよびリッケルの問題設定の不十分さ、ひいてはカント認識論の限界を超出しようとする際の道標であるとともに、ヘリゲルが遺稿を通して一九一三年以降のラスクに認める「かつてとられた観点の不意の徹底的な変更、およびそれとともになされる哲学上の新しい方位設定の試み」[2]を惹起せしめるにいたった当のものであり、そこにラスクの認識の理念の核心を見定めることが可能となると思われるからである。

一　認識の理念の拡延とその構制

ラスクは自らの認識の理念について次のように言う。「理論的〈意味 Sinn〉を掌握すること、範疇的に獲得（betroffen）された質料を獲得すること、このことが常に認識の〈意味〉である」。（Ⅱ181）。こうした定式はまた次のようにもパラフレーズされる。「あるもの Etwas を認識するとは、あるものを範疇的に被覆された質料として自己の前にもつことを常に意味する」（Ⅲ143）。つまりラスクが言う認識は、質料に範疇を結合することと一般化しうるが、その際質料が単に感性的なものに限定されることなく、非感性的なものもそれに含められることによって、彼の認識の構図は旧来の認識論、特にカントのそれを範とするものと異なる構制をとることになる。以下こうした認識の基本的枠組に関する彼の含意をみよう。

ラスクの認識の構案においてまず確認しておくべき特質は、彼がカントのコペルニクス的転回の理念をカント自身の認識論に応用し、認識の対象を個別的には二世界説から二要素説に改変したことである。

改めて確認するまでもなく、カントの認識論史上の意義は、思惟の形式のみを研究する一般論理学もしくは形式論理学に対して、内容または対象に関係する先験的論理学を構想し、これによって「認識の起源・範囲および客観的妥当性を規定」[3]しようとしたことである。その際彼がとった立場は、周知のように認識を感性的印象によって与えられる「素材」または「質料」と、我々の認識能力が与える「形式」との合成物としながら、質料を客観の側に、形式を主観の側に配当し、認識は「形式」によって可能なるものとすることによって、従来の「我々の認識が対象

に従わねばならない」という想定を逆転した、「対象が我々の認識に従わねばならない」というもの、すなわち考え方の革命＝コペルニクス的転回であった。だが言うまでもなく、カントにおいて認識の及ぶ範囲は現象界＝感性界 mundus sensibilis に限られており、叡智界 mundus intelligibilis はこれから除外されている。

ラスクが問題とするのはカントのこうした認識論の枠組である。すなわちラスクは従来の認識論の欠陥を認識対象がただ「存在領域および存在認識」のみに限定されていることとし、それを「カントの非感性的なるもの Nicht-Sinnliches の認識不可能性のドグマ、範疇的内実の感性的―直観的なものの領域のみへの限局、理論的思索の『自然の形而上学』への制限」（Ⅱ22）に由来するものとする。結論的に言えば、ラスクは感性界の認識においてすら既に質料の受容という感性的認識だけでなく、形式としての悟性的認識がかかわっている以上、認識は自己自身を反省の対象となしうるとともに、悟性的認識と感性的認識、あるいは形式と内容は、認識を構成する二つの契機あるいは要素であることが表明されているとみるのである。ここから更に彼は次のように言う。「対象的な存在領域の中に非感性的に妥当する形式が介在するのは、他方において前者と同一である意味の領域の中に、非妥当的感性的質料が見出されるのと同様である。二世界説は二要素説 Zweielemententheorie に改変されるべきである」（Ⅱ45）。

このような二要素説の意義は、如何なる対象も形式と質料の統一体としてあることの論理化であることにある。すなわちラスクはカントのように形式と質料を抽象的に分離するのではなく、形式が「妥当するもの Geltendes」として独立してありえず、必ず自己以外の他者、すなわち質料を指示し、これによって充実されなければならないことを形式の「向妥当性格 Hingeltungscharakter」（Ⅱ32, 83）と規定し、形式の作用としての妥当 Gelten が向かい、それによって充実されるものを質料あるいは内容と規定する。更に彼は形式と質料が融合して形式が内容充実を伴って現出する全体を「意味 Sinn」（Ⅱ34）と規定する。こうして客観領域また真理の領域は意味の領域となるのであり、それ故認識とは意味を掌握することとなるのである。こうした認識対象の規定は、ゾムマーホイザーによれば、実在的なものの認識の理論として、認識の権利問題 quaestio juris から事実問題 quaestio facti への問題設定の転換を意味しているのである。(4)

それではラスクは認識の対象たる世界の構造を総体的にはどのように捉えるのか。ここに彼が認識論的思惟についての論理的反省として定立した認識対象の構造理論、すなわち「階層 Stockwerk」理論が顧られなければならない。

さてカントの認識論の課題はあくまでも自然認識の範疇を発見することに限られていたが、彼はその範疇自身を如何にして認識するかということを更に問題にすることはなかった。それ故ラスクが言うようにカント的二世界説にあっては、論理的なるものは、「故郷を喪失している」(II 260) といわざるをえず、認識の不徹底が指摘される。ラスクはこの問題をまず存在界と妥当界との二対象説として解決しようとする。彼によれば感性界の根本形式は「存在 Sein」であり、「存在するもの Seiendes」はすべてこの存在という形式と感性的質料とから構成されたものである。したがって存在は存在するものから区別されるものとしてすべての存在者の形式、すなわち感性的領域の「領域範疇 Gebietskategorie」である (II 31, 71)。更にラスクは「〈存在〉が感性的なものに対する領域範域を与えるかぎり、〈妥当〉にも非感性的なものに対する領域範疇という対応的役割が帰せられなければならない」(II 100) として妥当領域の領域範疇を定立し、これをも認識の対象領域とする。彼がそうするのは、二要素説にしたがって認識が形式—質料構造を有するならば、形式そのものが認識されるためには、その形式を質料とする「形式の形式 Form der Form」(II 49) がなければならず、そして形式は質料に向妥当する hingelten のであるから (vgl. II 83)、形式の形式は妥当するものの形式、すなわち「妥当」でなければならないからである。かくして存在が存在界の領域範疇であるように、妥当は妥当界の領域範疇であり、また存在するものが存在から区別されるように、妥当するものは妥当と区別される。つまり二要素説に基づいて認識対象を妥当界と存在界とする二対象説 Zweigegenstandstheorie が成立するのである (II 94, 96)。

ところでラスクはこの二対象領域の境界を成す「存在」を自己の質料に対して妥当する形式であるとともに、その「形式の形式」に対しては質料となるという二重の役割を演ずるものと捉え、対象界全体の在り方を「二階造り」とする (II 103)。こうして世界は最下層に単なる非妥当者、すなわち「〈ただの質料 Nur-Material〉、原始質料、最下層の質料」(II 50) を置き、最上層に「論理的形式一般」(II 62) をもつ無限の連鎖と考えられることになる。この際ラスクは存在界における対象を形式と質料から成るものとしたのに対して、妥当界における対象を範疇形式と範疇質料から成るものとする。したがって対象を構成する二つの契機はそれぞれ相対的であり、より高次の形式に対しては質料となり、より低次のものに対しては形式となる。また感性的なものは必ず内容ないし質料であるが、質料は必ずしも感性的なものに限られず、これに反して形式は常に非感性的なものであることになる。このような対象構造においてラスクはある対象が対象として存立する所以をなすものを「意義 Bedeutnng」(II 60) と規定する。そして質料を「意義限定の契機」(II 59) とし、これによって形式の分化が生じ、また個別的対象が分立する

とするのである。

以上のようにしてラスクはカントが認識の対象を感性界に限定し、また理性の働きを「仮象の論理」とし、その所産を統制的原理に押し留めたのに対して、自ら標榜するところの「理性の汎主宰 Panarchie des Logos」(Ⅱ133) の現実化を図ったといえる。また彼が質料を個別化の原理としたことは、アルトヴィッカーが言うように、現実に即する形で認識の問題を考察しようとしたこと、すなわち観念論の拒否の現われとみることができるのである。(5)

さて認識に際して不可欠な要因は範疇である。これに対するラスクの処置を検討してみよう。カントは先験的論理学を形式論理学から区別しながら、形式論理学に基づく判断表から範疇表を導出した。こうした手続きが新カント派内部においてすら疑問視されたことは、よく知られている。(6) こういう経緯の中で、ラスクとしてはあくまでも先験的論理学の形式論理学に対する優位という立場から範疇の導出を試みるのであり、そうした試みは構成的範疇 konstruktive Kategorie と反省的範疇 reflexive Kategorie との区別にみられる。すなわち彼は存在の領域範疇と妥当の領域範疇、つまり「存在」と「妥当」を実在的対象という意味での構成的範疇と規定し、これに対して構成領域の全体に適用される「あるもの一般 Etwas überhaupt」の形式を反省的一般的範疇と規定する。同一性の範疇が最も一般的なものとして反省的領域の領域範疇であり、「異他性」「及び」「多数性」「数」等が特殊反省的範疇である (vgl. Ⅱ141)。ところでラスクによれば、構成的領域と反省的領域との関係は、元来客観的にある構成的領域を我々の主観が作為Künstlichkeit によって稀薄にし、生気を失せさせることによって内容一般の模型である「あるもの一般」が生じ、これに同一性という反省的範疇が結合されることによって反省的領域が成立するというものである (vgl. Ⅱ140f.)。こうしてラスクは反省領域は構成的領域を前提とし、また反省的範疇は構成的範疇に基づくが故に、構成的なもの、すなわち認識の形式は反省的なもの、すなわち思惟の形式に対して優位をもっているとするのである。このような形で導出することによってラスクは範疇を、理論的な形式でありながら、対象と不分離なもの、更には対象そのものによって与えられるものとしようとするのであり、そこに新カント派の主観主義から客観主義への転換の様態を看取しうるのである。

以上のように認識の構成要件を確認した上で、ラスクの認識の意味の了解が可能となる。彼は言う。「あるもの(エトヴァス)を認識することは、論理的に裸であること logische Nacktheit から追い出されて、範疇的に捕獲されているあるものを探すことにほかならない」(Ⅱ81)。「論理的に裸で

あること」とは、質料が未だ形式をまとわない状態にあり、形式と距離をとっていることを示す。したがって一つの形式も、その形式の形式に対して質料の位置をとらないかぎり論理的に裸であるのであり、規定不可能なのである。ここからラスクにおいて認識とは結論的に言えば、質料としてあるものを形式によって再構成することであり、そのことは同時に形式の形式を明示するという形で階型としてある対象的世界におけるあるものの位置を規定することをも意味する。ラスクはこうして非感性的質料の把握も非感性的直観によって可能になるとするのである(vgl. II 201, 209, 214f. 217)。こうした認識の理念は、彼のフッサールの『論理学研究』への言及からも明かなように(II. 14, 34, 36f. etc.)、対象そのもののイデア的直観可能性を前提している。その意味ではラスクは事象そのものの把握の構造を論理化しようと試みたとみることができる。

二　認識論の原理としての〈妥当〉概念

右にみたラスクの認識の問題構制を根底において規定しているのは、既に何度か言及のみした〈妥当〉の概念である。このことは、「このうえなく多種の媒介を経て、幾千もの陰影と濃淡をもって現われる多様な価値、意味、意義は究極的には直截的妥当 schlichtes Gelten に由来する」(II 10) という立場から、哲学の使命・課題が「妥当範域を比類なき仕方で哲学的考察の新区画として、感性的に存在するもの並びに超感性的に存在を超えてあるものに対して限界づけること」(II 15) と定立されていることから明らかである。ラスクにおける妥当概念の重要性に鑑み、以下ではその問題圏に踏み入ることにしよう。

ラスクが妥当を哲学の原理としたことはドイツ西南学派の所謂価値哲学の展開にいわば革命的旋回をもたらした。まずこのことから確認しておこう。

周知の如くドイツにおける価値哲学はロッツェ (Hermann Lotze, 1817–1881) に始まる。[7] 彼は〈妥当〉の概念を「妥当する内容に関して存在の現実性を拒否するとともに、我々の思惟からの独立性を主張する」と定式化し、プラトンのイデアの性格をそれとした。[8] ラスクはロッツェの〈妥当〉の概念の意義を「存在するものおよび存在を超えてあるものと並ぶ妥当するものを第三王国として発見したこと」(II 14) と評価しながら、ロッツェが「妥当するものがただ形式のみであることを認識することがなかった」(II 36) ことをその限界とする。結論的に言ってラスクはこのように主張することによって、存在と妥当の二元論、そしてまた妥当するものは普遍的で、存在するものは個別的であるとする教

説を覆滅したのである。このことは、ラスクが二世界説を否定し、二要素説を提起したことと同義である。

またラスクは、ヴィンデルバントがロッツェによって唱えられた「存在と妥当との対立」[9]を固定化し、しかも妥当を価値と重ね合わせ、「当為と存在、価値と現実とは異なっていなければならない」[10]と主張したことを「二世界説の更新」(Ⅱ14)でしかないとみる。その理由は、ヴィンデルバントが妥当の根底に「一般的承認の要請」をみ、しかもそれを「経験的主観内における認識過程の彼方を指示している」[11]もの、あるいは価値をして価値たらしめる「規範意識 Normalbewußtsein」[12]と規定したことにある。すなわちラスクはヴィンデルバントが価値の客観性を否定したことに対して、妥当ひいては価値の実在性を対置したのである。

更にラスクは自分の師リッケルトが「価値概念を論理学の中心概念」としたことによって、「妥当が色彩と性格を受取り、論理的なるものはその孤立から救出され、その事象的故郷を指示されている」(Ⅱ15)という事態が生じたことを評価しながら、その問題点を次のように指摘する形でリッケルト批判を展開する。「哲学的考察が妥当概念から出発せずして、価値概念から出発する場合には、哲学の全課題圏がその限界線を消去して〈価値科学 Wertwissenschaft〉という不可分離的全体として叙述されやすい」(Ⅱ12)。このラスクの批判を理解するために『哲学の論理学』が書かれた頃のリッケルトの主張を簡単に確認しておこう。リッケルトは認識を「判断」すなわち肯定あるいは否定と規定することから、認識の対象を「当為の領域」に求めるが、それ自身を「超越的意味」、ひいては「超越的価値」と規定する[13]。判断が対象とする真理は実在とは異なる超越的なものであるが、価値こそ「必ず妥当しなければならないもの」として、「完全に自らのうちに休らい、そのようなものとして存在および全く主体へのいかなる関係からも完全に独立している」[14]ものなのである。リッケルトによれば、こうして意味は価値の領域に属するものであり、価値が認識主観と結合されるときに当為となり、規範として現われる。更にリッケルトは「価値の本質はその妥当である」とする観点から、哲学を価値と結びついたあらゆる現実を考察する「価値論 Wertlehre」と規定するにいたる[15]。こうしたリッケルトの価値把握に対してラスクが問題とするのは、存在に対する価値及び当為の「論理的先行」「優位性」が想定されることによって、「超越的当為」および「超越的意味」と存在対象との間に距離が置かれ、第一にこの「意味」が対象に対して優先関係を持つのではなく、かえって模写的関係に立つ、第二に一般に対象と帰一する理論的意味があるという真の事態が抑圧否定される、という結果を惹起する、ということである(vgl. Ⅱ119)。ここでもラスクはリッケルトが価値と存在を区別し、価値を非実在とするノミナリズムに定位することを批判していることが看取されるのであ

る。ともかくラスクは価値哲学において前提とされてきた妥当あるいは価値と存在との二元性を斥け、妥当あるいは価値の実在性を主張するのであって、こうして価値哲学は新しい段階に到達したことになる。

ところで右に見たラスクの主張の基軸は、「意義、意味、とりわけ価値という概念」を「妥当概念の派生物」（Ⅱ26）とするところにある。旧来等置されてきた妥当と価値を彼が基本と派生の関係に置きかえる理由はどこにあるのか。このことを明らかにするためには、ラスクの妥当と価値との関係の把握を問うことから始めなければならない。ところがラスクは公刊された著作において妥当概念と価値概念の差については、次のようにしか展開していない。「価値性 Wertartigkeit は妥当が主観性の側から来るそれ〔妥当〕に適合的な承認 Anerkennung に関係づけられる場合に初めて妥当に現出する特定の意義のニュアンス Bedeutungsnuance である。そのとき妥当性は承認に値すること、すなわち価値として現出する」（Ⅱ388）。必ずしも明快な文章ではないが、ともかくこの引用が言わんとすることは、価値とは主観の側における妥当に対する承認があってはじめて現出する意義だということであろう。リッケルトのように価値を前提し、その本質として妥当をとらえるのではなく、ラスクは妥当を根源とし、その主観的承認の存立態を価値とするのである。そしてこのような価値を先とするか妥当を先とするかという問題設定は、同時にラスクにおいては、妥当は超越を、価値は内在をそれぞれ本質とするという理解と重なっている。このことは遺稿として刊行された《論理学の体系のために》の叙述からも確認される。すなわちそこでラスクは意味の概念と妥当の概念を等置した上で「無数に破砕し、陰影をもち、褪色した意味の全領域が価値にほかならない」（Ⅲ65）とし、こうした意味の分化について「主観的なもの、自我的なもの、精神的なもの、理性、悟性が価値の舞台としてだけでなく、（略）価値の核心そのものとみなされた」（Ⅱ89）と述べているのである。一言で言えば、価値は妥当の主観的存立形式にすぎず、価値概念をもってして妥当の本質は曇らされてしまうというのがラスクの主張なのである。

このようなラスクにおける妥当の価値に対する優位性の主張は、認論理念との関連においても、妥当概念そのものの規定的内容の対自化を要求することになる。それは大約以下の七つにまとめられるように思える。

(1)　形式　既に触れたことでもあるが、カント以来の形式あるいは範疇に妥当性を見出す伝統に従ってラスクは妥当の根本規定を形式とする。「ただ形式のみが無時間的に妥当する性質であるべきであり、しかも妥当するものは、ただ客観的事象性の領域における形式の役割のみを果たすものである」（Ⅰ32）。ラスクは妥当するものを形式とするだけでなく、端的に「あらゆる妥当は形式である」（Ⅲ140）とするのである。

(2) 無時間性　前項において形式が無時間的なものと規定されたことからも明らかなように、ラスクは存在するものを時間のうちにある有限なものとするのに対して、妥当を無時間的なものとする。「我々は無時間的なものを肯定的に妥当、意味の国と理解する」(Ⅲ64)。こうした把握はプラトンがイデア界を永遠としたことと類比的なのである。

(3) 非感性性　感性的なものが質料としてあるのに対して、妥当は形式として非感性的なものである。「妥当的なもの、および価値的なもの一般は、非感性的なるもの一般として、端的に単純な契機である。既にこの単純性のために、妥当と価値の原現象 Urpbänomenon は対立的に分裂しているものではなく、かえってただ統一的に唯一なるもの Einheitlich-Eines である」(Ⅱ398)。ここに言われる妥当と価値の原現象は妥当と価値の具体的な様態ではなく、即自的に捉えられた場合の規定を意味する。

(4) 超主観性　妥当性は普遍的なものである。それ故それはまさに超主観的なものであることを意味する。「超主観的妥当が〔形式と質料の〕複合した構造物の外部にあり、しかも体験から把握されるものと考えることは、超越性 Transzendez の状態において考えるということである」(Ⅲ103)。かくしてラスクは妥当そのものの内実は意識内在性 Immanenz の立場からは把握不可能だとするのである。それ故この超越性の立場は妥当を主観的に基礎づけようとするカント派の基本的立場を超出することを意味する。

(5) 客観性　カントに始まる先験的観念論の基軸は、形式ないしカテゴリーをあくまでも主観すなわち悟性の所産とすることであった。そのかぎり形式したがって妥当も客観そのものには帰せられなかった。しかるにラスクは端的に妥当あるいは形式が客観そのものに属することを主張する。「存在することなく妥当するところのものは、とにかく存在するものにおいて〈現出する〉のである」(Ⅲ67)。彼はより直截に次のようにも言う。「我々は客観主義的傾向に従う。究極の無媒介なるものは、我々にとって主観に対して妥当し来るところの意義である」(Ⅲ91)。このような妥当の規定はその把握様式にも大きな転換をもたらすことになる。

(6) 直覚性　ラスクは妥当認識の対象の原基的な存立態を形式と実質との原組織 Urgefüge と捉えるが、これ自身における純粋妥当を「光線の束」(Ⅱ397) とし、その可認識性を「範疇で捕獲された実質への、すなわち論理的形式の力に服する実質への、言いかえれば破砕されない対象と合致した無対立の真理の原形象的構造組織への、端的な帰依 schlichte Hingabe」(Ⅱ396) に求める。こうした認識の構案は一見奇異な印象を与えるにせよ、ハイデガーも指摘するように、フッサールの範疇的直観の思想の受容に基づくことは、容易に察せられる[16] (vgl. Ⅱ36f. Ⅲ164)。

(7) 行為の要求　ラスクは妥当をリッケルトの価値規定のように静止的に自存するものと解するのではなく、「一定の実行に値すること、ふさわしいこと、それを要求することが妥当の本質をなす」(Ⅲ92) と言う。ラスクは妥当をただ価値、要求と捉えるのは副次的な思想にすぎないとしてこうした把握を斥けるが、承認や帰依といった行為を要求することは本質的内容と捉えているとみることができる (vgl. Ibid.)。

以上ラスクの妥当概念の主要な内包を確認した。それら自身既にみたロッツェ、ヴィンデルバント、リッケルトの妥当概念そのものとの差異を明示しているが、ここにおいて更に明らかにすべきことは、ラスクが妥当概念に定位することによって、認識に関して、前節の構案に加えて如何なる見解を展開したかということである。以下では主として『判断論』における認識の具体相の了解を検討する。

三　判断の超文法的主語—述語的構造の解明

実際の認識過程に関するラスクの見解の第一の特質は、対象そのものが形式と質料との一体性において捉えられることによって、リッケルトのように判断によってはじめて認識が成立するとする見解は斥けられ、通常の判断は「第二義的、非対象的領域に属する」(Ⅱ288) と結論づけられることである。すなわちラスクは、判断決定の客観の本質を決定するためには、客観が自体においてあるところのものと、それが主観性に対して現われねばならぬところのものとを区別しなければならないとして、従来の判断論が扱ってきたものは専ら後者であるとする (Ⅱ313)。いうまでもなく前者は原像であり、後者はその模像にすぎない。ラスクの妥当哲学からして前者は意味であり、通常の判断論を超える論理的判断論は「〔判断〕作用から切り離しうる意味の構造」(Ⅱ292) を問題とすることになる。すなわち一般に判断は肯定・否定の決定であるが、これは当る場合もあればはずれる場合もある。すなわち前者は「的中性 Zutreffenheit」であり、後者は「錯誤性 Irrigkeit」あるいは「誤謬 Irrtum」である。しかるにラスクはこうした判断作用に対応する「判断意味」が存在するとして、的中性には「正当性 Richtigkeit」が、錯誤性には「不正当（虚偽性）Falschheit」がそれであるとする。だがこうした対立する判断意味を決定する規準は、その外になければならない。ラスクはそれを「真理性あるいは合真理性 Wahrheit od. Wahrheitsgemäßheit」と「反真理性 Wahrheitswidrigkeit」とする。それは同時に価値と反価値とも規定される。こうして価値あるいは反価値について裁決されるものがラスクが言う意味での判断決定の直接的客観、すなわち「判断決定の第一次客観 primäres Objekt」(Ⅱ299) となる。それゆえ、真理性または反真理性をそれぞれ真理性あるいは反真理性として判断す

る判断意味が正当性であり、真理性を反真理性として、また反真理性を真理性として判断する判断の意味が不正当であることになる。こうしてラスクは妥当領域を扱う論理学を哲学の論理学として展開したのと同じく、判断に関する判断として論理的判断論を構築した。

ところで、ラスクのこのような判断論の構想は、判断そのものの構造把握の転換を前提にしてはじめて可能となる。それは階層理論に基づく「超文法的主語―述語理論 die metagrammatische Subjekt -Prädikatstheorie」(Ⅱ291) すなわち「超文法的に解された述語的規定の段階構造論」(Ⅱ336) として提起されている。ラスクの判断論の意義を確定するためには、これをみておかなければならない。

ラスクは通常の形式論理学における判断構造のうちでは、主観性が働くことによって対象を「不具」にするような加工あるいは変形としての「対象からの距り」が生起するとし、そこから通常の判断の特質を「直截的対象的原始構造への作為的構造錯雑化 künstliche Strukturkomplikation の付加」(Ⅱ291) と捉え、判断構造と対象構造の対質から両者の架橋を試みる。だがそれは対象構造に適合する形への判断構造そのものの改変となる。すなわち彼は旧来の判断や概念、推理などの形式を「構造形式 Strukturform」とし、それから彼が樹立した範疇の形式を「内実形式Gehaltsform」として区別し (Ⅱ330)、範疇あるいは範疇形式の構造分析から「認識の先験論理的かつ超判断的な本来的原始概念」(Ⅱ332) を確定し、そこから判断構造としての主語述語関係を規定する。ラスクによれば認識の使命は範疇質料としてのあるもの(ὄντως)を論理的あるいは範疇形式によって捕獲された状態において探求することであるから、「認識は、その本質並びに事象からして述定作用 Prädizieren として、すなわち質料的主語について範疇的述語を陣述することとして把握される」(Ⅱ333)。ここに認識と判断との合一が語られているが、ラスクの判断＝認識の概念は、述語が主語に含まれないカント的な先天的判断という形式的な意味のものにとどまるものではなく、多様な直観内容を統一している対象そのものの範疇による規定的再現という意味での先験論理的認識のそれなのである。こうした認識の特性が超文法的主語―述語理論として開示される。いま「aはbの原因である」という判断を単に文法的に外面的にとれば、aは主語であり、「bの原因」は述語となる。しかし先験論理的にみるときには、aとbの全体が真の主語であり、「原因性」が主語の関係形式として述語であり、前者が範疇質料、後者が範疇形式と解される。しかしそれも更に高次の範疇形式に対しては範疇質料になることはいうまでもない。それはともかく、このように先験論理的にみれば判断構造は主語すなわち範疇質料と述語すなわち範疇形式とから成立し、それらの結合が総合判断となる。こうした判断の構案が、一方には主語と質料と直観との間に、他方には述語と形式と思惟との間に本質的連関を成立させることによって、単なる文法的意義以上の客観的意

義を有することは明白であろう。[17] では彼がいう論理的判断はこの超文法的主語―述語理論にどのように依拠することになるのか。

ラスクによれば判断の、したがってまた対象の構造は範疇と範疇質料との二要素の結合からなる。ところでラスクは対象そのものは、真理性および反真理性、正当性および不正当性という価値対立的な判断領域を超えた「超対立的 übergegensätzlich」な価値領域であり、そこでは形式‐質料の二要素の結合の仕方は、直接的で対立のない「抱合 Verklammerung」(Ⅱ364) であると捉える。この場合要素は「先形式的非感性的なもの das vorformale Unsinnliche」と「先質料的なあるもの das vormateriale Etwas」とであって、この両者の間にのみ「原始関係 Urverhältnis」が成立する (Ⅱ367)。こうした超対立的対象の原始関係が崩壊することにより、「第一次客観」が成立し、判断による形式と質料との適合不適合、相属不相属ということが起こる。既に判断の客観は対象そのものではなく、第一次の対立が成立をみている。しかし、客観そのものは超文法的主語―述語的に分節化されているが故に、判断内容が客観に対して合真理性または反真理性の対立を有することは、明証的である。それ故、それに対する第二次的主観の関与によって「内在的意味」(Ⅱ416, 423) が成立し、そこに真偽に対するそれぞれの肯定否定がなされる。既にみたとおりこれが第二次の対立で、二重の対立を有することになる。要するに真理に対する肯定と反真理とに対する否定が正で、その逆が偽である。このように対象の破壊が認識であるにせよ、究極の標準は、妥当としての超対立的意味との一致であり (Ⅱ443)、それは判断過程においても維持されるものとされる。

このようにラスクにおいて対立領域は作為的領域であり、こうした対立性と作為性を作り出すものは主観性である。それ故ラスクにおける認識主観は、カントにおけるような対象構成機能をもつのではないが、逆にそれだけ対象に従うものとしての現実的な経験的主観に近づいたものとして構成されていると解されるのである。

四　客観主義の隘路とその超克の試み

前節までラスクの認識の理念を公刊された二著を中心にみてきた。ここで問題になるのは二著刊行後のラスクである。ヘリゲルが言う後期ラスクにおける見解の変更が何如なるものか、まず公刊された著書とそれ以後の遺稿における論点の差異を確認し、次に見解変更のよってきたる所以の捉え返しを試み、最後に新しい立場の意義の闡明を試みる。

さてヘリゲルによれば、ラスクは一九一三年の初めにそれまでの論理学上の客観主義が袋小路に陥ったことを自覚し、「ラディカルな〈主観主義〉」に転換した。ヘリゲルがこうした主張の論拠としているのは、ラスクが遺稿《哲学の体系のために》で採用した哲学の分化原理が「生活Leben」であり、そこから主体の態度に応じて宗教、理論、実践、美という領域が展開されているということである。[18] この見解の当否は後で検討するとして、ここではまず認識論の問題構制の枠内で後期ラスクにおける客観主義の放棄を確認することから始めてみよう。

まず第一に確認されることは、ラスクが認識そのものにおける主観性の意義の評価を変えていることである。『判断論』においてラスクは次のように述べていた。「主観性には対象的存立をその全体性と非分離性において、その原像的完全性と完結性において、単純適切に受容することは恵まれていない」(II 417)。このような評価は、認識を意味の把握とする場合、主観性が関与すれば対象的原形象と合致する超越的意味の体験が不可能となり、認識が成立しないという認定があることを意味する。ところでラスクは《哲学の体系のために》においては認識理論をそれ自身としてはほとんど展開せず、現実的世界への実践的態度と区別される「非現実的な意味への理論的態度」を「精確な意味での本来的認識」(III 189) と規定するぐらいである。しかしこの規定が旧来の視角と異なるものであることは、「認識においてはまさに主観が、くびり取られた、形式-質料的に組織された諸客観に対してだけ基体 Substrat である」(II 204) として、主観が認識の客観に対して基本的意味を有することが認められていることから明らかである。

こうした主観の重視は、第二に認識における形式-質料関係に対して、主観—客観関係を根源的とする態度と連動している。すなわちラスクは《論理学の体系のために》では次のように書いていた。「我々は（略）この究極の、相互に還元しえない関係と注視性 Hinsichtlichkeiten をもち、それらのうちに妥当が存しているのである。すなわちそれらは体験と実質との二つの面に妥当が注視すること及びかくして生ずる主観—客観関係と形式—実質〔質料〕関係である。これらのうち最後に扱われた関係〔形式—実質関係〕は、事態そのものからして第一のもの、本質的なもの、あるいは根源的なものであるが、それに対して他のもの〔主観—客観関係〕は偶然的に付け加わったものである」(III 112)。客観主義からして主観の作用を否定的に評価し、客観のうちの形式—質料を重視することは当然と言える。しかるに《哲学の体系のために》においてラスクは次のように言う。「〈意識〉のうちに、すなわち感性的な多くの内容に属する〈体験〉のうちに光が射し込むこと、それはしたがって体験による両世界〔非感性形式の世界と感性的実質の世界〕の根本結合であり、根本的関係は主観—客観関係である！感性的体験主体が中

心基体なのである」（Ⅲ182）。他の点はともかく、ここで明らかに彼は主―客関係を根源とし、形式―質料関係を第一義的なものとはしない。

しかもこれだけではない。ここに第三に形式そのものが主観の側におかれることになる。ラスクが以前は形式そのものを対象の側に置いていたことは、「客観的領域は〈形式〉をもっている！」（Ⅱ32）と述べていたことから明らかである。ところが彼は《哲学体系のために》において前面は、次のように書いている。「超感性的契機は主観性に貫徹されて形式になる。」「私が基礎に置くのはカント的な、すなわち主観的な形式の概念である」（Ⅲ216f.）。このようにラスクは形式を主観の側に置くことにより、かつての自己の客観主義の立場を排棄したのである。

以上のようにラスクにおいてかつての客観主義が撤回されるとき、注目すべきことにかつて彼が過大とも言える自負の念をもって論理学の未解決の課題の解決のための鍵鑰として語っていた妥当概念は、主題的考察の対象ではなくなる。代わりに《哲学の体系のために》において前面に登場するのは価値の概念であり、そこから哲学の体系が価値の体系として展開される。しかも、そこでは価値の概念規定が与えられることなく、ほぼ理論＝観想 Kontemplation、実践＝倫理、芸術、宗教という人間の生活形態が価値の性格を基準にして対比されるにとどまる。

それではラスクのこのような客観主義の撤回の理由はどこにあるのか。ここでもまたヘリゲルの説明を引照すれば、ラスク自身カントのなしたコペルニクス的転回のカント自身への適用としての二要素説そのものがカント以前的な、あるいは古代的な、対象そのものの中に形式＝形相を認める立場への回帰であったことを自覚するにいたった、ということになる。[19] こうした説明は一般的には適切であるかもしれない。しかしだからといって新カント派の主観主義への単なる復位を説くことは、ラスクの意義を無規定的に否定し去ることになる。こうした没概念的評価を超出するために、ここで認識に関わる問題圏の中で一九一二年までのラスクの問題点を確認しておこう。

まず第一に挙げられる問題は、認識における主体の位置付けに不整合があることである。すなわち既に確認しておいたようにラスクは真理基準としての超対立性が、主体の「帰依」によって明るみに出されるとしながらも、現実的な認識の場面では、「主観性はもはや単なる帰依の位置において現われるのではない」（Ⅱ416）として、主観によって捉えられる客観は「意味断片 Sinnfragment」（Ⅱ430）でしかないとするのである。言うまでもなくここには認識されるものが予め存立することがいわれ、しかもそれが超対立性として把握された形で示されながら、それ自身次の場面では可能ではないという仕方で、模写論に固有なアポリアが露呈しているのである。

第二に挙げうる点は、先験的論理学そのものの不徹底である。ラスクの建前では対象領域は論理的構造を有するが故にたとえ存在的には超越

的であっても論理的把握が可能であるとされる。だがそれが可能であるのは高い段階の意味構造に関してであって、質料そのものは、位階こそ下であっても超越的実在として把握を絶したものとして定立されているのである。ここにはカントが物自体の存在を言いながら、その認識不可能性を説いたのと同じ問題がある。ついでに言えば、裸のマテリーは存在しないのであって、「質料そのもの」の存在を前提すること自体がラスクの二要素説を否定することになるのである。

更に第三にラスクは客観主義を標榜しながら客観主義に留まりえていない。一方で対象の組織は主観に無関係に存在するとされるが、他方範疇として構成的と反省的とが挙げられ、前者から後者が導出され、最高の範疇が同一性とされていた。しかるに同一性とは反省的範疇であり、それはそれ故主観の介在によって成立する範疇でありながら、これなくしては対象の構成そのものが成立しないのである。ここには対象構造が主観と不可分の関係にあることが示されている。

最後に第四に指摘しうるのは、非合理主義への後退である。クライスも指摘しているように、ラスクにおいて理論的形式一般が様々な妥当形式あるいは範疇に分化するのは、形式一般の自己分裂によるのではなくて、質料の多様化に基づく。[20] その結果として種々の意味が分化するとされるかぎり、形式は非合理的感性的質料に支配されることになる。このことはラスク自身自覚していたことでもあった。「妥当が何如にして実質に到達し、そして初めて実質において形式が位置づけられるかということについては、我々は思料できない。我々が妥当を有し、かつ見い出すのは、ただ既に実質に付着した、また実質に差し向けられた事態においてのみである」(III 111)。ここにはまた妥当概念そのものの破産が語られているといってよい。質料が形相分化の原理であるかぎり、妥当そのものも質料に支配され、妥当は常に質料の追認に終り、他への働きかけの要求という規定も、結局質料そのものにはまさしく妥当しないことになるからである。「理性の汎主宰」は非合理の専一支配に属するのである。

以上から明らかなようにラスクの理論構成はその内部に妥当概念と一体化した客観主義が自己止揚されねばならない必然性を有していた。だがそのことが直ちにラスクをして主観主義へと転換せしめたのであろうか。ラスクが客観主義を否定したことはヘリゲルが言う意味でのラディカルな主観主義に立場を変えたことを意味したのではない。それはラスクの形式およびこれと価値との関係へのこだわりが示している。たしかにラスクは先の引用でも示したように、《哲学体系のために》のある箇所でカント的形式への定位を語っている。しかし彼は他の箇所において

は「個人的personal―カント的意味での形式は、複合的な形象においては個人的な価値契機である」（Ⅲ228）と規定し、更には≪学問の体系のために≫においては、カント的に範疇形式の適用を経験的質料に制限することによっては「哲学の自殺」（Ⅲ250）が結果することを説いている。より直截的にラスクは自分自身の見地を、意味を対象とする認識の立場として次のように書いている。「超感覚的なものおよび事態への態度は、超個人的 transpersonal な態度であろう」（Ⅲ194）。すなわち認識価値は超個人的な価値であって、それは個人的価値のみを目指す個人的主観に基づく形式によってではなく、超個人的な価値を志向する超個人的な形式に依らなければならない、言いかえれば認識の形式は主観的でありながら、超主観的でなければならない、というのが彼の主張なのである。

このようにみるとき、晩年のラスクが目指した認識論上の立場は、主観主義、客観主義双方を超出するものであったと言ってよかろう。なぜなら彼はある箇所で認識の素材を現実的世界から根源的に与えられるもの、それに対して形式をそれに付け加わるもの、非独立的なものと規定したあと次のように言うからである。「全根源的領域は（略）実質として観想的客観に入り込む。だがそれは間に侵入して来る形式によって直接的体験から駆逐され、引き離される。根源的には〈諸対象〉があるのではなく、範疇的に把握されて対象となるあるもの Etwas だけがある。だがあの根源的なあるものは、範疇を自体的に持っているのではなく、観想によってはじめて外から受け取るのであり、それは後から観想によって捕獲される。その際理論的媒体〔範疇〕は観想的主体に従属する。このことがなければ内容は形式のうちに立つことはない」（Ⅲ179f.）

こうした認識の枠組の提示のうちに主観主義、客観主義双方を超出しようとする志向を認めうる根拠は二つある。一つは近代的な主観―客観図式という枠組で語っているかに見えながら、ここでラスクは認識を主観―客観の協働という視角から論じていることである。すなわち彼は物自体によって触発された直観が範疇によって統一されるという式の、主観内部での質料―形式関係の処理方式をとるのではなく、あくまでも第一次的に全根源的領域と形式とのいわば直接的出会いによって客観が成立するという姿勢をとっているのである。彼が「ある点からすれば、認識はまさしく最も直接的である」（Ⅲ188）と言うのもこの故であろう。もう一つの根拠は彼が一方では認識の主観的契機、すなわち形式を重視しながら、他方では認識を「内容が形式のうちに立つこと」という形で押さえ、かつて二つとも客観の側においた内容と形式を主観と客観に振り分けつつも、内容を重視するかつての枠組を完全には放棄していないということである。無論これら二つの根拠をもってしてもここに提起されている構図で認識の充全性が獲得されうるものではない。しかし前者の根拠を基軸として、かつてラスクが展開した構案を再評価するならば、

彼の認識の理念には尚積極的な今日的意義を認めうることになる。

五　遺産の発展的継承の視角

ラスクが最後に提出した認識の理念はあくまでも素案にすぎず、またそれ自身多くの問題点を抱えている。彼が放棄したかつての客観主義的理念を含めてその批判的継承の視点を三点ほど摘記してみたい。

まず最初にラスクが『哲学の論理学』で提起した二要素説は、その宗教的含意を払拭すれば大きな意味をもつ。二要素説を彼が最後に提起した主―客関係把握のうちに組み込むことにより、一つの独自の枠組を構築しうるからである。すなわちラスクにおける主観―客観の関係把握は、客観を質料とし、主観を形式とするものであるが、主観、客観双方が二要素的に組み替えられるのである。その理由は認識を主客の協働と捉え返すなら、客観あるいは対象が二要素的であるとともに主観もまた二要素的であるのが実際だからである。すなわち客観が形式―質料の一体性としてあるのと同じく主観も自ら感性的素材を内容として持ち、しかもそれらを自らの持つ形式を介して〈あるもの〉として持っているのが認識の現実なのである。

第二に、以上の主観―客観連関の捉え返しは、認識を単に「観想」とし、実践に対置するラスクの理念の修正を必然化する。なぜなら、後期ラスク自ら認識の対象たる「観想的客観」を「意義を規定する観想的主観性の産物」（Ⅲ232）と規定しているように、認識そのものが一つの実践的活動であるからである。まさにいかなる認識対象も思惟作用の産物なのであって、事物の本質は主観の働きによって規定されているのである。ラスクは実践を必ずしも道徳に切り詰めることはせず、「実践哲学は同時に生活の哲学」（Ⅲ186）と規定してもいるが、こうした観点を堅持することによって彼が陥った新カント派固有の真・善・美・聖といった価値概念に規定された哲学の分類・性格付の狭隘さから脱し、それらを別の仕方で処理しうるようになるのである。

第三にラスクが認識あるいは理論の基本性格とした「超人格的なもの」（Ⅲ191）あるいは「客観価値」（Ⅲ193）、「超主観的価値」（Ⅲ229）は、彼自身言うところの「実践的生活と観想的生活は共に世俗的現世的生活を構成する」（Ⅲ358）という観点から捉え返されなければならない。ラスクは認識を「単なる影の国への献身」「生活からの離反」（Ⅲ178f.）と特徴づけることによって、主観的価値の渦巻く場である「生活」（Ⅲ

183)、すなわち「根源的世界」「元来の世界」(Ibid.)にかかわりのない「非人称的」(Ⅲ178)すなわち普遍的＝客観的なものたらしめようとした。しかし、既に確認したように認識が人間の実践の一形態であるかぎり、その「客観的価値」はあくまで生活のうちに胚胎するものでしかない。それらはラスク自身の言う「あらゆる間個人的—社会的 interindividuell-sozial な諸連関」(Ⅲ177)の物象化的形象なのであって、彼自身が放棄せざるをえなくなった妥当の概念も、こうした視角から捉え返されることによって認識におけるその真の意義を再獲得しうるのである。

むすび

自ら新カント派の内部にあってカントが構築した認識論の枠組みの狭隘さを打破すべく鋭意ラスクが提示した構案は成書の範囲内でも哲学的思考の何たるかを余蘊なく物語っているといえよう。惜しむらくは彼の「転回(ケーレ)」以後の思索は発表を前提とした形では集成されていないがために、本論のテーマである認識の理念に関しても余りにも分明さを欠いており、それ自身として解明することは困難であった。しかし一旦確立した自己の立場を放棄しながら、尚固有の地平を拓かんとした彼の志向性の所在は多少とも確認しえたかと思う。結論的に言って後期ラスクの思索を後期フッサールの相互主観性あるいは「生活世界」の哲学の先駆形態として捉え返すことにより、前期ラスクの認識の構案をも積極的に再評価しうる視点を提起することが本論の基底的モチーフであった。遺憾ながら彼の遺産を継承発展させるための視角の確定については時間・紙幅の制約もあってきわめて意にみたないものになってしまったが、他日別の形で再度試みることとしたい。

付記　本稿は昨年十一月三十日に開催された倫理学原論研究会月例会で「ラスクの価値哲学」と題して発表した内容を基とするものである。当日出席された方々、特にその後の研究方向を触発する質問を寄せられた諸先生、院生諸氏に感謝の意を表する。

注

引用は Emil Lask Gesammelte Schriften 3Bd. Hrsg. von Eugen Herrigel, Tübingen 1923-4 による。ローマ数字で巻数、算用数字でページ数を示す。

(1) Rudorf Mater, Heinrich Rickert und Emil Lask, in: Zeitschrift für philosophische Forschung, 1966, S. 97.

(2) Eugen Herrigel, Vorwort des Herausgebers, I. XIXf.

(3) Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, Hrsg. von R. Schmidt, Hamburg 1956, S. 99 [A. 57,B. 81].

(4) Hanspeter Sommerhäuser, Emil Lask, in: Zeitschrift für philosophische Forschung, 1967, S. 140. Vgl. R. Mater, op. cit., S. 94.

(5) Norbert Altwicker, Geltung und Genesis bei Lask und Hegel, Frankfurt am Main 1971, S. 7.

(6) Vgl. Wilhelm Windelband, Vom System der Kategorien, Tübingen 1924, S. 5.

(7) Vgl. Herbert Schnädelbach, Philosophie in Deutschland 1831-1933, Frankfurt am Main 1983, S. 197.

(8) Hermann Lotze, Logik, Hrsg. von Georg Misch, Leipzig 1928, S. 512ff.

(9) W. Windelband, Einleitung in die Philosophie, 2. Aufl., Tübingen 1920, S. 213.

(10) Ibid., S. 426.

(11) Ibid., S. 212.

(12) Ibid., S. 255.

(13) Heinrich Rickert, Zwei Wege der Erkenntnistheorie, in: Kant-Studien, Bd. XIV, Berlin 1909, S. 181f., 184, 209.

(14) Ibid., 209f.

(15) Vgl. H. Rickert, Vom Begriff der Philosophie, in: Logos, Bd. I, Tübingen 1910/11, S. 17.

(16) Martin Heidegger, Sein und Zeit, 11. Aufl., Tübingen 1967, S. 218.

(17) こうした評価の仕方は高橋里美『認識論』(昭和十二年)、七八頁に基づく。

(18) Vgl. Eugen Herrigel, Emil Lasks Wertsystem, in: Logos, Bd. XII, Tübingen 1924, S. 116f.

(19) Vgl. Ibid., S. 104ff.

(20) Vgl. Friedrich Kreis, Zu Lasks Logik der Philosophie, in: Logos, Bd. X, Tübingen 1921/22, S 230f.

Idee von Erkenntnis bei Lask

Kiichirô TAKEMURA

In diesem Aufsatz beleuchte ich die Idee von Erkenntnis, die Emil Lask entwickelt hatte.

Das klassische Begriffs-Paar Form und Materie bildet den Ausgangspunkt für Lasks Erkenntnislehre. Während die Form der Träger der Geltung ist, hat die Materie die Funktion des Nicht-Geltenden in der Form-Materie-Verhältnis. Doch faßt Lask zugleich den Gegenstand selbst als die zwei Elemente in sich habend. Nun behauptet Lask, daß zwei Sphäre, die Welt des Seienden und die Welt des Geltenden, die Welt der Gegenstände macht aus. Es gibt daher nur zwei Stockwerk von Gegenstände, deren höchstes durch Geltendes gebildet und von der Gebietskategorie Gelten bezeichnet wird.

Was die Kategorienlehre betrifft, so zergliedert Lask sie in die Lehre von den konstitutiven und reflexiven Kategorien; den Kategorien, die besondere Gegenstände des Erkennens bedingen, den konstitutiven Kategorien des Seins-wie des Geltungsbereiches stehen die allgemeinen, subjektiven Kategorien gegenüber, die Lask die reflexiven Kategorien nennnt.

Schließlich hat Wahrheit, sagt Lask, ihren Ort in einer außerhalb des Urteils stehenden Beziehung des Geltenden zur Materie, denn all Wahrheit braucht die Besonderheit des Wahren, die niemals durch den immer gleichen Akt des Verknüpfens auszudrücken ist.

Zwar ward diese Idee von Erkenntnis vom späten Lask zurückgenommen, aber beging er keine Art Umkippung, die Herrigel versichert.